

64年 兄の供養やっとな

海軍掃海艇から遺骨収集

第2次世界大戦中、インドネシア・スラウエシ島(旧セレベス島)南部のマカッサル沖で撃沈された旧日本海軍第11号掃海艇の遺骨収集に参加した大牟田市歴木の笠原美代さん(82)と夫の忠雄さん(83)

がこのほど、美代さんの兄池田二郎さん(当時24歳)の遺品などを故郷の松山市内に「納骨」した。美代さんらが海底から収集した遺骨は身元が特定できず、厚生労働省に遺灰が安置されているが、遺



64年ぶりの供養と納骨について話す笠原さん夫妻—大牟田市市内

大牟田の「戦後が終わった」

族からは「これでやっとな戦後が終わった」との声が漏れたという。

池田さんが乗り組んだ第11号掃海艇は1945年3月28日、マカッサル港を出港後、米軍機の爆撃を受けて沈没した。乗組員300人のうち81人は救助されたが、池田さんから219人は海中に沈んだ。

兄の戦死の状況を知りたいと思っていた笠原さん夫妻に05年12月ごろ、沈没場所の海底に船体らしきものがあるとの情報が届いた。今年6、7月、日本政府の遺骨収集団の一員として現地入りし、船底などから引き揚げた日本人の遺骨10柱を焼骨して遺灰を日本に持ち帰った。

遺骨の代わりに先祖の墓に収めたのは、池田さんが出征前に残した遺品など。供養には親族17人が参列し、忠雄さんが遺骨収集の模様を報告し

た。兄に代わって戦後、家を守り続けてきた美代さんの弟(80)は「ずっと続いていた戦後がやっとな終わった」と、安心した様子だったという。

マカッサル沖での遺骨収集が7月に報道されると、笠原さんのもとには全国各地から電話や手紙で問い合わせが相次いだ。福岡市内の男性(90)は、第11号掃海艇に乗り組む予定だったが、直前に任務の都合で後続の第34号掃海艇に変更。第11号掃海艇が二つに折れ、船首を立てて海中に沈む様子を約1000メートルの距離で目撃した、と伝えてきた。乗組員たちは「お母さん」や、家族の名前などを叫んでいたという。

美代さんは「これで一区切りついた。二度と若者が戦争で命を落とすような日本になっただけはほしくない」と語った。

(田中良和)